

史料にみる **歴史**

渡辺始興筆『四季耕作図屏風』

(『社会科 中学生の歴史』p.81掲載)

個人蔵

四季耕作図は、一年を通しての稲作の作業を描いた絵画で、春・夏・秋・冬へと四季の移ろいとともに展開される。そのため襖や屏風、巻物など横長の画面に描かれる場合が多い。本図も縦155.9cm、横727.2cm（一双合わせて）の画面である。

四季耕作図の早い作例には、狩野元信（1476～1559）の弟、狩野之信が描いたと伝える大徳寺大仙院の襖絵がある。その手本は中国から伝わったものであろう、人物などの表現が中国風である。以後、狩野派の画家たちが、よく四季耕作図を描いているが、いずれも中国風の人物描写になる。しかるに江戸初期の狩野派の画家久隅守景（生歿年不詳、17世紀）は、多くの四季耕作図屏風を残しており、それらは日本の農村風景の中の農作業を描いている。守景は実際に農村風景や農作業を見て絵筆をとったものと推測している。その守景の四季耕作図の延長線上に位置づけられるのが、本図であると考えてよいであろう。

渡辺始興（1683～1755）は、京都の人で、始め狩野派を学んだが、のち尾形光琳（1658～1716）について、装飾的な琳派の画風を継承した。早くより近衛家熙（1667～1736）に仕え、多くの作品を描いている。その絵は狩野派風と

琳派風を巧みに使い分け、両様の作品が見られる。江戸期、琳派における尾形光琳の後継者とされる画家である。

六曲一双の本屏風は、右から春夏秋冬へと展開し、その中に農村の人々の生活と農作業を描き込んでいる。おそらく京都近郊の農村を実地に取材して描いたと考えられ、その描写は実にリアルである。まずは全体を眺めてみよう。視点を手前の相当に高いところに置き、パノラマ的に農村全体を鳥瞰した構図となっている。画面手前に街道と思われる一本の道が真横に走り、遠くにはなだらかな山並が続く。屏風の中央部に農村の家々や田畑が広がる。右隻（本図）下部の道の手前には苗代、続いて牛を使って長床鋤での田起こし、そして、田植えの情景が描かれる。田掻きをしているのは男性で、田植えは女性である。

左隻では、すでに稲刈りが行われ、刈田や稲掛けの場面へと移る。画面中央の大きな農家の前庭では、千把こきで籾をほぐしたり、土臼や唐箕が置かれ、左端では千把こき、くすり棒、唐臼などによる脱穀の場面で、一連の米づくりの作業がほぼ終了する。

本図が興味深いのは、農村生活と街道の風物が、ともに描かれていることである。右隻右端の大きな農家の前庭では、正月の代神楽が演じられ、道行く人々も足を止めて土堀の中を見ている。中央の街道に面した茶店では、旅人たちが床や床几に腰掛けて茶を飲んだり、たばこを吸ったりの休息姿が捉えられている。荷物を肩に道に行く一行も目にとまる。茶店の脇には二

挺の駕籠が置かれ、片方には人が乗っている。いずれもリアルな描写である。さらに、左隻左端では、家の普請の光景も描き込まれている。道に面してイスに座るのは棟梁であろう、膝の上に指図を置き、何やら話をしているらしい。家作の場面を描くのもたいへん珍しいものである。

稲作以外にも綿花の栽培やたばこの葉を干すようすも見られる。また、農業用具も長床鋤、万鋤、千把こき、土臼、龍骨車、唐箕なども描かれており、実に正確で使用方法も的確である。中でも唐箕の絵としては、最も早いと考えられており、18世紀中ごろの絵である。

『社会科 中学生の歴史』p.81の掲載場面は先に触れたとおり、屏風の右隻中央で、街道に面した茶店の部分である。

街道の手前の田では、右方に苗代があり、すでに五束ほど束ねられている。左手には牛を使っての田鋤と畔で憩う二人の農夫。農夫の間には土瓶と茶碗も見える。

道の左端には二人の子ども。左手の少年の荷には稲の束があり、田植えの場へ運ぶところである。右手には荷を担いだ旅人が二人、道を急ぐのであろうか。そして、茶店では休息を取る人々の姿を描いている。店の中には草鞋が吊り下げた状態である。このように、本図は稲作の光景とともに、街道の風物と四季折々の農村生活の情景を捉えている。当時（江戸中期）の人々の生活の実態を精緻に伝えてくれており、たいへん興味深い絵画である。

(前甲南女子大学教授 木村重圭)